



子どもたちの 笑顔のために

相馬市立八幡小学校
嶋原 啓美

「校長先生、おはようございます。」「校長先生、さようなら。」校長室前の廊下を歩いていく低学年の子どもたちが元気よくあいさつをしてくれます。

私が理想とする学校は「子どもたちの笑顔があふれる学校」です。単身赴任、初めての相双地区での勤務、しかも校長という重責から私自身なかなか笑顔になれなかった4月当初、子どもたちから笑顔をもらいました。そして、この子どもたちの笑顔のためにがんばろうと気持ちを新たにしました。

学校は子どもたちが心身ともに、安全・安心に過ごせる温かい場所でなければなりません。子どもたちの自己実現のために、教職員が一丸となって応援し、喜びを笑顔で分かち合えるそんな温かい学校にしたいと思っています。相馬地方の校長会の先輩方にご指導をいただきながら、自分の職責を果たしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。



初心を忘れずに

相馬市立磯部小学校
永井 崇

新任校長として4月より磯部小学校長を拝命し、着任いたしました。相双地区とは大変深い縁があり、教諭、教頭、校長の全ての職で赴任し、今回で3度目となりました。3回目ということではありますが、初心を忘れずにこれまでの経験を踏まえ、さらに校長としての責務を全力で果たして参りたいと思います。また、学習指導要領の柱の一つである「地域に開かれた教育課程」の実現に向けて、学校と家庭や地域との連携をしっかり図り、本校の地区ならではの教育活動の実現に向け、伝統の継承と発展、創意工夫という視点に立ち取り組んで参りたいと思います。併せて、これからの予測不可能な時代を乗り切る上で必要となってくる資質・能力を子どもたちに育み、何事にも主体的に取り組める子どもたちの育成を全力で目指していく所存です。今後とも、校長会の皆様からのご指導とご助言をよろしく願いいたします。

編集後記

第134号発行にあたりご多用の中、玉稿をお寄せくださいました相双教育事務所長様をはじめ、諸先生方へ心より感謝申し上げます。ワクチン接種も着々と進んでおりますが、まだ安心できる状況には至っていません。今後も校長会での情報交換や貴重なご指導、ご助言をもとに、学校においてリーダーシップを発揮し、先を見据えた学校経営を進めていきたいと思ひます。相馬地方小学校長会の皆様、どうぞよろしく願いいたします。



瑞穂の国の 子どもたちのために

相馬市立飯豊小学校
木村 裕之

お世話になった先輩から「瑞穂の国の子どもたちをお願いします!」と、メッセージカードが届きました。着任し、すぐにこの意味が胸にストンと落ちました。『故郷・朧月夜・紅葉』等で有名な高野辰之氏が作詞をされた校歌の歌い出しが、この「瑞穂乃国」なのです。それは学校前一面に広がる美しい田園風景のことであることは疑う余地もありませんでした。校歌が制定された昭和5年から今日まで、この地が豊かであり続けていること、校歌と学校や地区名が美しいまでにリンクしていることに感動をしました。

着任早々、ご挨拶にお越しくださったPTA会長様とOB会会長様、その後お会いした区長様方から頂戴したお言葉からも、使命感に駆られ、決意を新たにしました。相馬地方校長会や諸先輩方からご指導とご助言を頂戴しながら、瑞穂の国の子どもたちのために頑張っまいます。どうぞよろしく願いいたします。



「温故知新」から 「温故創新」へ

相馬市立日立木小学校
青田 伸一

「温故創新」。これは、以前お伝えさせていただいた校長先生から頂いた言葉であり、これからの教育においては、新しきを知って満足するのではなく、前に進むために新たに創造することが大切という意味を込めて贈っていただいたものです。4月に着任以来、新型コロナウイルス感染防止対策をはじめ、様々な教育課題を抱えながらも、一步一步学校運営を進めてきております。そのような中、この言葉が常に頭をよぎり、創新できているかどうかを問いかけてきます。未来を創る子どもたちのために、先人の歩み、相馬地方小学校長会の諸先輩方の知恵や考え方、立ち居振る舞いなどから学び、現状を的確に捉え、前へ進むための新たな創造を重ねながら取り組んでいきたいと思ひます。しかしながら、手探りを繰り返しながらの歩みになるかと思ひますので、校長会の諸先輩の皆様からのお力添えをいただければと思ひます。よろしく願いいたします。



今できることは何か

福島県教育庁相双教育事務所長
埴 広治

5月、昨年度はままたななかった運動会が、各学校ごとに様々な工夫を凝らしながら行われたというニュースが、新聞や学校ホームページ等から伝わってきて嬉しく思いました。子どもたちの心に残る有意義な時間を創出していただき感謝申し上げます。

「心に残る」という言葉の響きから、最近目にした新聞記事を思い出しました。5月30日の福島民友には、平成28年4月から3年間、文部科学省から本県に出向し、教育総務課長を務められた高橋洋平氏の「福島からもらった言葉たち」という記事が掲載されておりました。“人生に仮の時間はない”『今を生きる』という表題で、飯舘村の小学校が避難先のプレハブ校舎から、地元に戻る際に行われた仮設校舎の閉校式での卒業生の言葉が紹介されておりました。「6年間通った自分たちにとっては、ここは『仮設』校舎なんかじゃない。」この言葉にハッとさせられたとのこと。避難状態から元の学校に戻すという発想は、極めて大人側の考えであり、子どもたちは今を生きている。今この瞬間、この場所でいかに生きるかが大事だということ子どもたちから教えてもらったというのです。

社会の変化に伴い、教育の在り方も大きく変わってきています。教師の言うことに従順な子を育てるのではなく、自分で考えて行動し、集団に貢献できる子どもに育てることが求められています。また、社会の変化に対応する力だけでなく、自ら変化を創り出していく力が求められています。とは言え、「言うは易く、行は難し」です。子どもたちの「今」を大切に、未来を創造していく力を育むために、今できることは何かを問い続けたいと思ひます。



ICT活用の 推進に向けて

相馬地方小学校長会長
伏見 康弘

新型コロナウイルスの影響で、児童生徒に一人一台タブレット端末を配備し、学ぶ環境を整える「GIGAスクール構想」が前倒しで進められている。ICT環境の整備により、学習活動の一層の充実や主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善が期待される一方、各学校では授業や授業外でのICT機器の効果的な活用が課題となっている。

新採用から5年目の時である。先輩の先生とパソコンを買い、ワープロや表計算ソフト（ゲームも）を使っていたが、授業で効果的な使い方はできないだろうかと考えた。その時代は、作業がキーボードからコマンドを入力するものであり、プログラムを組む技量などがない自分にとっては、上手いかなかったことが思い出される。

しかし今、パソコンはキーボードから入力しなくても、マウス操作で簡単に使える時代となった。さらに、パソコン室に行かなくても、タブレット端末で疑問に思ったことを調べたり、情報をやりとりしたり、発信したりすることもできる。また、参加者が同じ会場に集まらなくてもWebで会議を開催することができ、コロナ禍により盛んに行われている。

ICTの便利さは分かっているが、自分が得意でなかったり、できなかったりするとどうしても使うことに躊躇してしまう。「学校のICT活用が進むかどうかは校長次第」という趣旨の調査報告も出されている。まずは、やってみてその楽しさを実感することが大切である。校長が、楽しみながら前向きに取り組むことがICT活用の推進になり、「令和の日本型学校教育」の構築に繋がっていくのではないだろうかと思う。

私の学校経営

大切なことは新潟で学んだ

南相馬市立太田小学校 高田 昌幸

「大切なことはすべて〇〇で学んだ」という題名の書籍が多数出版されていますが、私の場合は「学校経営で大切なことは新潟で学んだ」になるかと思えます。福島県の諸先輩方の背中を見なかったのかとお叱りを受けそうですが、それだけ、新潟での経験が、私に管理職としての矜持を持たせてくれています。10年ほど前に県外派遣教員として赴任した新潟市の学校は、毎年何名かの先生が休職する状況にありました。所謂、生徒指導困難校という学校です。この学校を強力なリーダーシップと卓越した経営能力、そして素晴らしい人格で運営していたのがM校長先生でした。福島からやってきた田舎者であった私を、校長先生は「馬廻衆」として朝から夜までお側に置いて下さいました。朝のあいさつ運動にはじまり、教室に行けない児童を校長室で落ち着かせてから登校させ、放課後は人形劇クラブの指導。夜は緊急事



態に対して、先生方を集めてのミーティングと様々な場面で校長としてのあり方を学びました。学級崩壊に陥ったクラスを、校長先生を中心とした7学年のチームワークで、落ち着きを取り戻させ正常に戻っていった経験は、私にとっても貴重な体験となっています。まだまだコロナ禍が続きますが、ややもすると消極的になってしまう自分を「先生腰が引けるねー」と励まして下さったM校長先生の言葉を忘れず、前に進んで行こうと思います。

学校紹介

児童会による「あいさつ運動」

相馬市立中村第一小学校 渡邊 義人

毎朝、校門で登校してくる児童を迎えています。児童の笑顔を見たり、元気なあいさつを返してもらったりするこのときが、中村第一小学校の「よさ」を引き継ぎ、さらによい学校にしていこうという校長としてのモチベーションが上がる瞬間です。

本校の自慢の一つに「あいさつ」があります。地域の方々や相馬市役所に通う方から、「中村一小的子どもたちのあいさつがとてもよい。」とお褒めのことばをいただいています。登校の際の校長へのあいさつも、目を見て、笑顔で、元気に「おはようございます。」と言ってくれます。中には、立ち止まってお辞儀をするなど、ていねいなあいさつをしてくれる児童も少なくありません。

このことは、児童会代表委員会をはじめ各委員会の児童が、毎週金曜日に交代で校門に立ち「あいさつ運動」をしている成果だと考えています。あいさ

つは、本校児童だけに向けて行うのではなく、通学中の相馬高校の生徒や通勤途中の市役所職員の方、地域の方へも行っており、本校のよさを発信する一つ的手段となっています。今後もこの取組を継続させ、児童のあいさつに対する意識をさらに高めるとともに、地域とのつながりをさらに深めていきたいと考えています。



随想

コロナ禍の中にこそ癒やしを

新地町立駒ヶ嶺小学校 村上 潤一

不要不急の外出自粛、時短営業、延期、中止…、減入ってしまうような言葉が並ぶコロナ禍。教育活動を行う上でも、「コロナ」の3文字が常に頭に重くのしかかります。休日の生活も一変しました。外食や買い物、旅行や遠出、娘の部活の追っかけさえもできず、ストレスがたまっていきました。「このままでは、おかしくなってしまおう…」そんな状況を救ってくれたのが、子犬を飼い始めたことでした。

新型コロナが流行り始める少し前、昨年1月のことでした。「見に行くだけね」と3番目の娘とペットショップへ。そこで子犬を抱かせてもらった娘にねだられ、ついに根負けしてしまいました。我が家にとって初めて迎え入れる子犬。「我が家に笑いと夢を！」との思いから「笑夢(エム)」と名付けました。初めてでいろいろ心配もありましたが、どん

どん我が家に慣れていくエム。今では、その愛くるしい表情やしぐさ、ぬくもりなどが家族にとっての最高の癒やしとなっています。動物とふれあうことで心が落ち着き、ストレスが軽減するなどの効果があり、不思議と元気が出てきたり、自信がついたりすると言われるアニマルセラピー。まさに、その「癒やし効果」を実感しています。

まだ続くであろうコロナ禍において、何でも話せる相手や常に寄り添ってくれる存在がより大切だと言われます。また、好きなこと、集中できること、お気に入りの〇〇など、気持ちをリラックスさせてくれるストレス解消法を多くもつことがメンタルヘルスの保持につながります。もう少しの辛抱であることを信じ、ストレスを溜め込まずに、このコロナ禍を乗り切りたいと思います。



新会員の声



子どもたち、地域のために

新地町立福田小学校 佐々木 芳三郎

本校校長室には歴代校長の肖像画や写真が校長の机を囲むように掲示されている。今でも校長室に入る度に身が引き締まる思いがする。

本校初代校長は氏家閑存。閑存は、明治の学制頒布前に県で最初に設立された学校「観海堂」の校長でもある。その「観海堂」設立の中心的役割を果たしたのが、この福田地区出身の目黒重真である。重真は、混沌とした明治初期に教育の重要性を説き、人材育成と郷土の発展に尽力した。時代を見据え、高い志と情熱をもって活躍した重真と閑存の偉大さを改めて感じている。

時代は令和となり、予測不可能な時代と言われる。社会の創り手、担い手を育てる私たちの仕事の責任は大きい。先人の思いを胸に、私も子どもたち、地域のためにしっかりと職責を果たしたい。諸先輩方、ご指導のほど、よろしくお願いいたします。



瞳輝く「山上っ子」に

相馬市立山上小学校 旗野 礼子

新任校長として初めて「山上っ子」の前に立った4月6日。「山上っ子」と初めて出会う大切な日に、緊張していた私を温かく迎えてくれたのは、子供たちの明るい笑顔と元気な挨拶でした。2名の6年生をリーダーとして、全員が胸を張り前を向く姿に、保護者の皆様や地域の方々、先生方から、どれほど大切にされ慈しんで育てられてきたかが伝わってきました。改めて気が引き締まると共に、子供たちが瞳を輝かせ、自信をもって学んでいける学校づくりに全力を尽くしたいと決意を新たにしました。

今年度の重点目標「自分から、気づき・考え、伝え合おう」の達成に向け、教職員、保護者、地域の方々と「チーム山上」として、「山上っ子」のよさを引き出し、認め、伸ばしていきたいと思っています。

今後とも相馬地方校長会の諸先輩方のご指導・ご助言をどうぞよろしくお願いいたします。